

日本と海外、公教育の語りの授業

櫻井 美紀

1 戦前の小学校教育の《お伽噺口演》

小学校教育と語りの結びつきの最も古い記録は一八九五年（明治二十九年）、巖谷小波^①が京都府の小学校訪問の際、全校児童へ日本の昔話を語って聞かせたことであつた。そのときの事情を巖谷小波は次のように書いている。

私がお伽噺の創作に着手して後、（二十七歳の頃であつたと思ふ）……私が京都に旅行した時に、ある小学校長から「是非私の学校に来てお伽噺をして下さい」といふ依頼を受けた。併し私はお伽噺を書く事は書いてつたが、その時迄は未だ、一度もお伽噺の口演と云ふものをしたことがなかつたので、その事を話した處が、「いや貴下のお伽話は皆生徒が面白がつて読んでゐるのですから、それを實地に口演して下さるならば、猶ほ興味を感じることでせう。枉げて口演して貰いたい」と云ふので、遂に——最初のお伽噺口

演を試みた。（巖谷小波『我が五十年』二九五ページ、東亜堂、大正九年）

その後、巖谷小波は学習院女学部と幼稚園で毎月一回お伽噺口演を行うことになり、これを「公開の席上に於ける、お伽噺口演の第一歩であつた」と同書に書いている。

一九〇二年（明治三十五年）頃からは巖谷小波は『少年世界』編集のかたわら、久留島武彦^②とともに全国の小学校を「口演童話」の実演をもつて巡回した。大正時代には巖谷小波・久留島武彦・岸辺福雄^③らが、童話愛好者を指導し、日本全国に数百人の口演童話家を育てた。（『日本口演童話史』博文社）

ラジオもテレビもなかつた時代の童話家の人気は非常に高く、ほとんど全国の町々、村々の小学校でお伽噺口演の会が催されたという。この活動を《童話》と言つた。その《童話》という言葉は今の《ストーリーテリング》の意味で使われ、演目はアンデルセン、グリム、日本昔話などであつた。

《童話》の魅力に惹かれた小学校教諭は有名童話家の門下に入り、研修を受けるものも多く、童話を学んだ教諭は自分の学級で児童に「おはなし」を聞かせた。戦前に小学生だった人に「小学校で『おはなし』を聞いたことがありますか」と聞くと、ほとんどの人が「雨の日には受け持ちの先生が体育館でお話を聞かせてくれた」という。大正以後、昭和の戦争の時代まで、そのような形で《お話＝ストーリーテリング》が小

学校教育の中で行われたのだった。

戦前の小学校教育の中で、もう一つ特徴的だったのは、国語の時間中に《お話発表》の時間があつたことである。これを《話し方》と言ひ、児童は教壇に上がり、五分程度の短い《お話》を発表した。戦前に小学校教育を受けた者には共通の経験である。国語の時間の《話し方》は、口演童話活動と小学校教育の結びつきから生まれたことであろうと、私は推察している。

2 一九七〇年以後の【読み聞かせ運動】と

【語り聞かせ運動】

一九六〇年代は戦後の新しい児童文学作家、絵本作家が次々に誕生した時期で、出版も好機を迎え、子どもの本の出版は大きく飛躍した年代である。

一九六〇年に、児童文学作家椋鳩十が《母と子の二十分読書》を提唱し始めた。一九六七年には「日本子どもの本研究会」・「日本親子読書センター」が設立され、家庭と地域と学校を結ぶ子どものための市民活動として、子どもの読書の推進運動を始めた。これら全国組織の二つの団体は、ともに小学校教員が中心になって、新しい児童文学を広めるとともに本を読んで聞かせる活動を始めたものである。《よみきかせ》ということばは、このときからの造語である。それは次第に地域の

母親を巻き込んで広まっていっていった。一九八〇年の頃には、子どもの本に関する夏期大会には、全国から毎年千人以上の教師と親が参加し、《よみきかせ》の実習が行われた。その頃から各地自治体でも、本の紹介とよみきかせの講習会が家庭教育講座・公民館・図書館などでも行われるようになった。

家庭文庫・地域文庫のはしりは一九六〇年代の末ごろからあつたが、一九七〇年代の終わり頃からは文庫の数は増え、一九八〇年の全国調査では、四、五五五文庫となつた。

その頃の小学校教員の一部は学級で《よみきかせ》を行つたが、地域活動の母親たちが地域文庫や家庭文庫で行う《読み聞かせ》の方が数の上でははるかに上回つた。日本の小学校教育の授業中に「教科書以外の楽しい本を読み聞かせる」ことはほとんどなかった。私立の小学校を除いて、公立の小学校では図書館の時間はあつても《読み聞かせの時間》の配慮は一九九〇年代末までほとんどなかった。

3 図書館のストーリーテリングと

市民文化活動の語りの実践

図書館のストーリーテリング講座で学んだ地域の母親たちが、市民文化活動としてストーリーテリングを始めるのは一九八〇年代からである（注・語り手たちの会の「語りボランティア全国調査・予備調査、語り始めた時期」『語りの世界』

三二一、二〇〇〇年)。

文部省が「心の教育」ということを提唱し始めたのは一九九七年頃からである。

一方、図書館員らによる学校図書館充実の働きかけもあり、小中学校には図書専門の教諭、あるいは臨時職員が配置されるようになった。学校に出向の図書職員は図書の時間に熱意を持って語りをする人もあるのだが、現段階では図書整理が多忙のため、語りの時間はないという人もある。

一九九九年(平成十一年)に、文部省は「学校図書館活性化」の予算を計上、初めて地域の父母・住民の力を借りる計画を実施した。同時に「心の教育」を謳い、読み聞かせを奨励する通達を出した。その年以後は、どの小中学校でも、地域の父母のボランティアを受け入れるようになった。文部科学省となつてから、「学校が地域の教育力を取り入れる」事業の中で、読み聞かせと語りのボランティアを受け入れている。ようやく小学生たちは、朝の授業の始まる前と、放課後の自由時間に地域のお話ボランティアのグループによる《楽しいお話》を開けるようになったのである。

現在、一つの市に四、五グループの「読み聞かせ・お話ボランティア」が活動するところが多く、全国では二万人から三万人(推定)の「読み聞かせ・お話ボランティア」が活動しているようである。

4 海外の学校教育のストーリーテリング

私は約十年前から、カナダ・アメリカをはじめ、海外の数カ国のストーリーテラーたちと交流している。そこで海外のストーリーテラーたちが学校教育の語りの授業とどのように付き合っているのか、海外の小学生たちは語りを学校内ではどのように受け取っているのかを報告したい。

カナダのオンタリオ州に住むストーリーテラー、キャシー・ミヤタは、オンタリオ州の学校教育評議会と一年ごとの契約を結び、オンタリオ州内の二十数校の小学校へストーリーテリングの授業に出かけている。以下はキャシー・ミヤタの言葉である。

「ストーリーテラーは、本来は人々を楽しませるものです。しかし、教育の手段としてもストーリーテリングは有効です。学校におけるストーリーテリングの役割は、次の四点と考えられます。

- ① 創造的な想像力を発展させる。
- ② 自分の国の文化、それぞれの国の文化への理解を増す。
- ③ コミュニケーションの技術を獲得する。聞き手はお話の主人公と一体化して、ことば表現を獲得する。
- ④ 文学への愛を育てる。物語を喜んで吸収することは、豊かな人間性を培う源となる。」

大きな都市にはプロフェッショナルなストーリーテラーが三十人、四十人と登録されている。教育委員会または教育評議会は、プロのストーリーテラーを学校に派遣する予算を持っているのである。

私は学校へ出かけるストーリーテラーたちが、楽器を持ってクラスへ行き、楽器を奏でながら語る姿をしばしば見かけている。各国のストーリーテラーが楽器を奏でながら語りをするのは、文学と音楽の融合したストーリーテラーとしてのアートを子どもに提供することである。

アメリカでは、幼稚園と小学校低学年のクラスには「シヨ・アンド・テル (Show and Tell)」という時間が必ずあって、これは大切なストーリーテリングの授業である。子どもたちは「シヨ・アンド・テル」のある日には各自が大切な品物を持って学校へ行く。お話の時間に「これは私の大切な○○です」と、その品物にまつわるお話をするのである。これは語りの一分野の「パーソナル・ストーリー」⁽⁴⁾であり、話し方のレッスンでもある。

言葉の教育は《読む》と《聞く》だけではない。語りの教育で特に大切なのは、自分の言葉で自分の考えや気持ちを他の人に伝えることである。

私は前述のカナダのストーリーテラー、キャシー・ミヤタに同行して二つの小学校を訪問した。そのほかの英語圏の国々

でも小学校、大学を訪問し、それぞれ日本の民話とわらべうたで授業をした。生徒たちはそれぞれの学年に応じて日本の語りを英語（歌の部分日本語）で聞いて楽しんだ。私は日本語のリズムを大事にしながら、ストーリーを聞いてもらうようにした。自国以外の言葉の文化と風土に触れる授業を、正規の学校教育に取り入れている様子が、海外の学校との交流で分かる。

また、海外でのストーリーテリングの授業は、ストーリーテラーが子どもたちに物語を聞かせるだけではなく、子どもの言葉を引き出す活動をするのである。そのことはグリムの研究者として知られるミネソタ大学教授のジャック・ザイプスが、数年前に日本で講演をしたときに「ストーリーテラーは学校に出かけて物語を聞かせて、子どもたちをよい気持ちにさせるだけではない。いまや、ストーリーテラーの役割は、語りを聞いた子どもたちから、子どもたち自身の《言葉》を引き出すことです。」と繰り返し述べた。

それは私の思いと重なることであった。今の学校教育の中で、《語りの授業》が担うべきところは、子どもの言葉を育てるところであると思っている。聞くだけの授業や、言葉を習う授業だけではいけない。言葉の使い方として《書く》ことだけを教えたのでは、真の言葉の教育とはいえない。言葉を使って考えたことや感じたことを他に向かつて伝えることが出来なければならない。人と協調し、自分が自分らしく、幸

せに生きることにつながる《言葉の伝達》は、文字を使って伝える前に、先ず、生の声で伝達しなければならない。それを授業の中で学ぶのが、語りの授業なのだ。

アメリカのテネシー州立大学にはストーリーテリングのコースがある。その大学で教鞭をとっていたフローラ・ジョイ博士は、テネシー州のジョンズボロの『ナショナル・ストーリーリング・ネットワーク』とタイアップして、『ストーリーテリング・ユース・オリエンピック』を毎年行っている。これには中学・高校のティーンエイジャーたちが全国から応募して、コンテスト形式でストーリーテリングの発表を行う。この中に自分の身の回りのエピソードを語るパーソナル・ストーリーや、世間話、偉人の伝記を語るものも含まれる。どの子どもも、生き生きと自分の言葉でストーリーを語るのである。他人の書いた作品を丸覚えで語る者はいない。そのコンテストのビデオを見れば、アメリカのストーリーテリング教育の成果を見ることが出来る。

5 日本の公教育、語りの授業の位置付け

二〇〇四年の今日でも、私は日本の小学校には、今だに明治時代の「読み・書き・そろばん」の意識があるように思えてならない。二〇〇三年十月に、私は広島県の某市立小学校の合同国語科研究部の発表会に参加した。一年生から六年生

までの各学年で国語の授業の見学をした。あるクラスは机の並べ方が自由であり、あるクラスは杓子定規であった。子どもたちの様子も、教師たちの取り組みかたで、自由に話せる雰囲気とそうでない雰囲気がはっきり分かる。教師が作成した報告の中に、「書く活動や音読を取り入れた読みの指導の工夫」のページがあった。そこには「自己表現力が弱い」「コミュニケーション能力をいかにつけていくか」が大きな字で書かれていて、語りの教育の工夫はない。続いて、

話し方名人になろう。／まっすぐ手を挙げる。／「はい」と返事をする。／聞き手の方を見る。／みんなに聞こえる声で話す。／さいごまでしっかりと話す。／わかりやすく工夫して話す。

となっていた。一年から六年まで参観するうち、先生も子どもも（参観日のせいであろうと思うが）硬い態度が気になった。子どもたちのために、楽しい国語の授業をしたい。私は国語の授業の中に「語りの授業」を取り入れる必要をひしひしと感じている。

しかし、現代の日本で語りの授業に取り組むところがまったくないわけではない。千葉大学教育学部の寺井正憲教授の『ことばと心をひらく「語り」の授業』（東洋館出版社）を読むと、寺井教授のユニークな実践には、勇気付けられるものが多いのだ。《笑い（落語を語る）》《占い》《ストーリーテラーになろう》などなど。人とともによく生きるための「語

り／コミュニケーション能力の育成」の授業がここにある。

日本では一九四六年（昭和二十一年）に、早々と『子どもの読書推進法』という法律が出来ている。国の学校教育の中で語りの教育を位置付けるためには、『語りの授業を進める法律』の制定が必要である。人が豊かな心で生きるための日常の言葉を育てるために、小学校・中学校の《語りの教育》が正當に位置付けられることを望むものである。

注

(1) 巖谷小波（一八九七～一九三三）は一八九一（明治二四）年に『こがね丸』を書き、これは日本で最初の創作児童文学となった。一八九二年博文館発行の『少年世界』の主筆となり、日本と外国の昔話の再話・翻案を始めた。

(2) 久留島武彦（一八七四～一九六〇）は近衛兵として日清戦争に従軍中、尾上新兵衛のペンネームで度々『少年世界』に作品を投稿した後、博文館に入社し、巖谷とともに口演童話の活動を始めた。

(3) 岸辺福雄（一八七三～一九五八）は新宿の自宅で幼稚園を創設、後に東洋家政女学校を創設した。幼児童話をはじめ、オーケストラをバックに女学校で昔話の口演を行い、ストーリーテリングの教科書としての『お伽噺の仕方の理論と実際』などの著書を執筆し、巖谷・久留島とともに明治大正時代の三大童話家と呼ばれた。

(4) パーソナル・ストーリーとは、家族のこと、知人のこと、自分のことを語るストーリーテリングで、日本には『ストーリーテラーたちー現代アメリカのフォークロア』（J・N・スミス著、阿彦周宜訳、大修館書店、一九九二年）によって初めて紹介された。同書の原題は『HOMESPUN』である。『語りの世界・36号』（語り手たちの会発行、二〇〇三年）に『パーソナル・ストーリー特集』があるので、参照されたい。

(5) このユースオリンピックのビデオが発売されている。
“National Storytelling Youth Olympics Concert” East Tennessee State University, Director: Dr. Flora Joy

（つぐらふ・みき 語り手たちの会代表）